

## く け が わ 九景川下流の集落遺跡 一出雲市・中上Ⅱ遺跡の発掘調査一

調査第一課 深田 浩

1. 遺跡名 中上Ⅱ(なかがみに)遺跡
2. 所在地 出雲市東神西町地内
3. 調査理由 平成30年度一般国道9号(出雲湖陵道路)改築工事
4. 調査主体 島根県教育庁埋蔵文化財調査センター
5. 調査期間 平成30年7月～平成30年12月
6. 調査面積 1,900㎡
7. 調査概要

### (1) 遺跡の立地

本遺跡は出雲平野南西部の出雲市東神西町に所在し、神西湖に注ぐ九景川下流の右岸に開けた小規模な谷間に立地します。標高は約12mで、宅地や畑地として利用されていました。遺跡の西方に流れる九景川を挟んだ西側の丘陵には中世山城の神西城跡があり、神西城跡東麓の丘陵斜面や水田部には、縄文時代後期から中世にかけての遺構・遺物が多数見つかった麓(ふもと)Ⅱ遺跡が存在します。

### (2) 調査区の設定

遺跡は東西に伸びる急峻な丘陵に挟まれた谷間に立地しており、谷の最奥部には滝が流れています。谷底に広がる長さ約50m・幅約30mの平坦面を1区、谷間の南側丘陵斜面にみられる小規模な平坦部を2区、谷最奥部の滝の周囲を3区として調査区を設定しました。

1区では現地表面の下層に近現代の宅地造成土が厚く堆積しており、造成土を除去したところ、かつて谷底部の中央を流れていた川跡(SR02)を検出しました。また3区では遺構・遺物とも確認できませんでしたが、土層の堆積状況を確認しました。

### (3) 調査結果

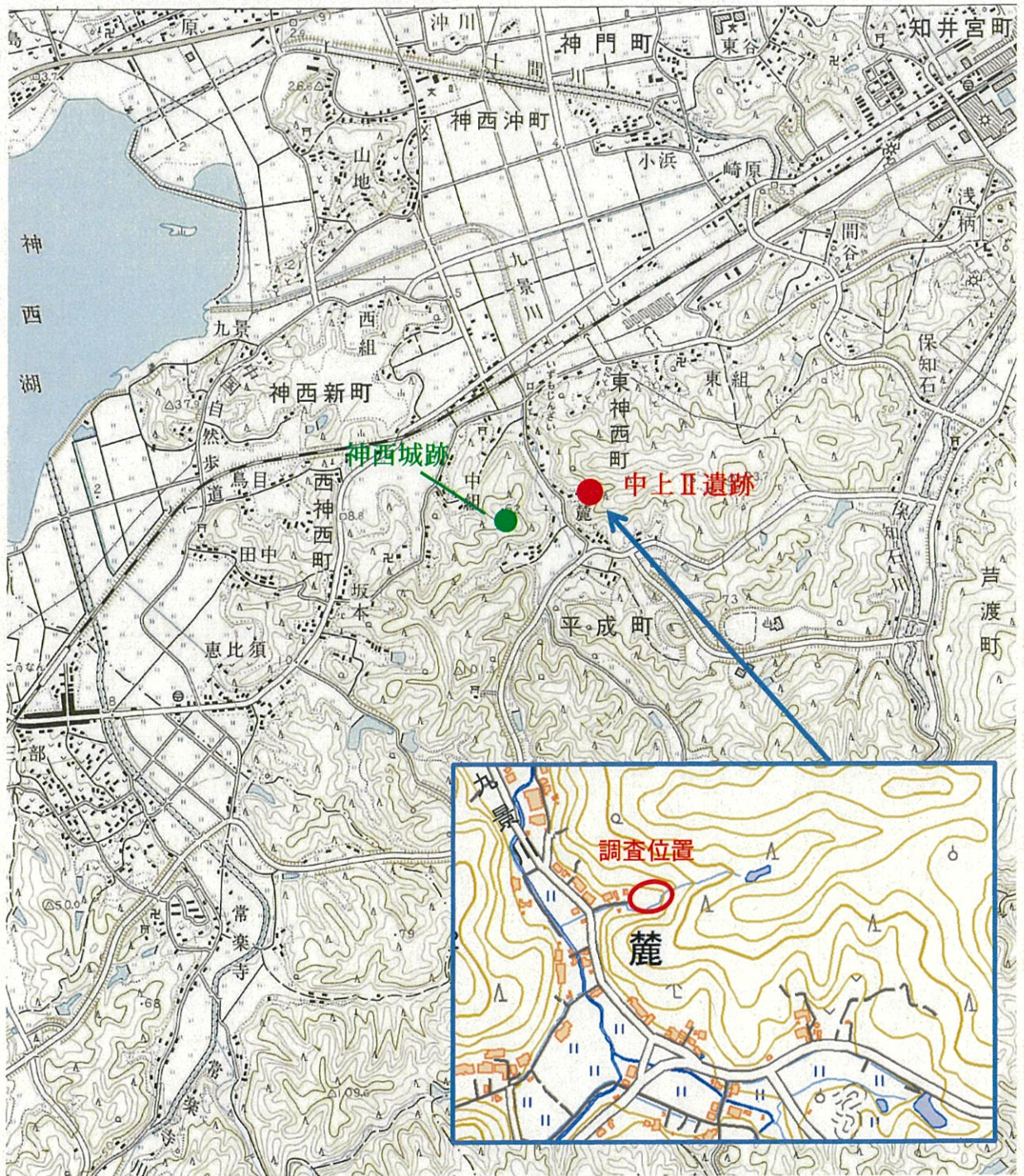
1区で検出した川跡(SR02)は幅約7m・深さ約1.5mを測り、川跡内や埋土からは近代以降の陶磁器類が大量に出土しました。本来は谷最奥部の滝から続く川の流路が直線状に伸びて九景川に注いでいたとみられますが、近代以降に川跡は宅地造成により埋め立てられ、流路も平坦部南端際に設置された現水路に付け替えられたものとみられます。またこの川跡の南側で、川跡に並行して伸びる幅約1.5mの水路跡(SR01)を検出しましたが、川跡と同時期に埋め立てられたと考えられます。

川跡の北側には盛土により造成されたとみられる平坦面が広がっており、上面から柱穴を多数検出しました。盛土内の上層からは中世前半期の土師質土器が出土することから、盛土は中世期に造成された可能性が高いと考えられます。また、この盛土層の下層から弥生時代後期～古墳時代前期、古墳時代後期の加工段を5箇所（加工段1～5）で検出しました。このうち古墳時代後期の加工段1では床面から壁帯溝や柱穴を検出し、掘立柱建物が建っていたと考えられます。その他、谷奥側の川岸で古墳時代前期の土器が集中して出土する地点を2箇所（SX01・SX02）で確認しました。一方、南側丘陵斜面の2区では、平坦面から中世期以前とみられる柱穴や溝が見つかりました。

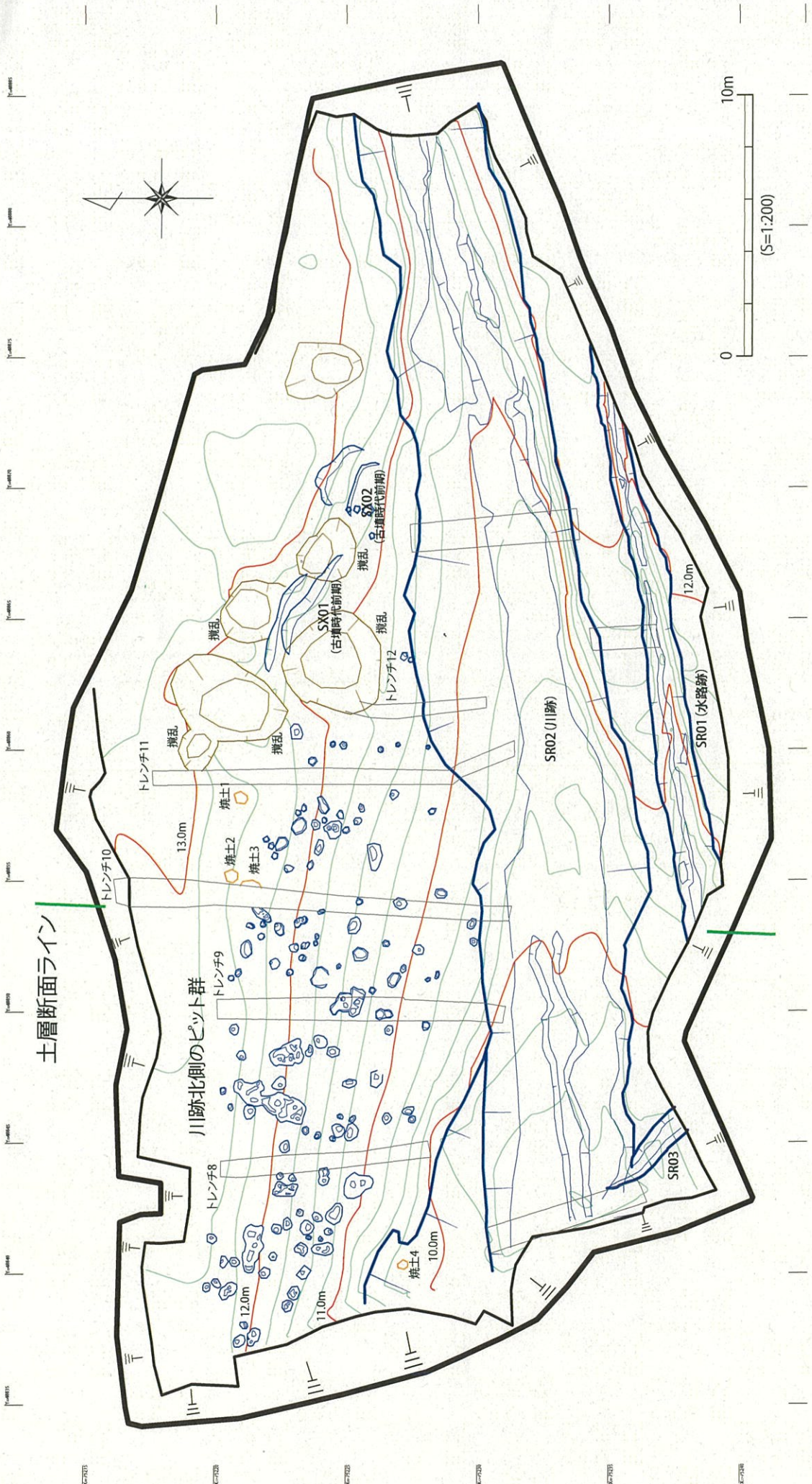
#### （4）まとめ

今回の調査では、1区の川跡北側斜面で弥生時代後期～古墳時代後期の加工段を5箇所と、谷奥側で古墳時代前期の土器集中地点を2箇所で検出することができました。特に土器集中地点は川岸付近に位置しており、周辺の岩盤を段状に削平した痕跡もみられることから、川辺において何らかの祭祀が行われたことも考えられます。また、この加工段群の上層には中世期に造成されたとみられる盛土層が厚く堆積しており、この時期に谷間を埋める大規模な開発が行われた可能性があります。

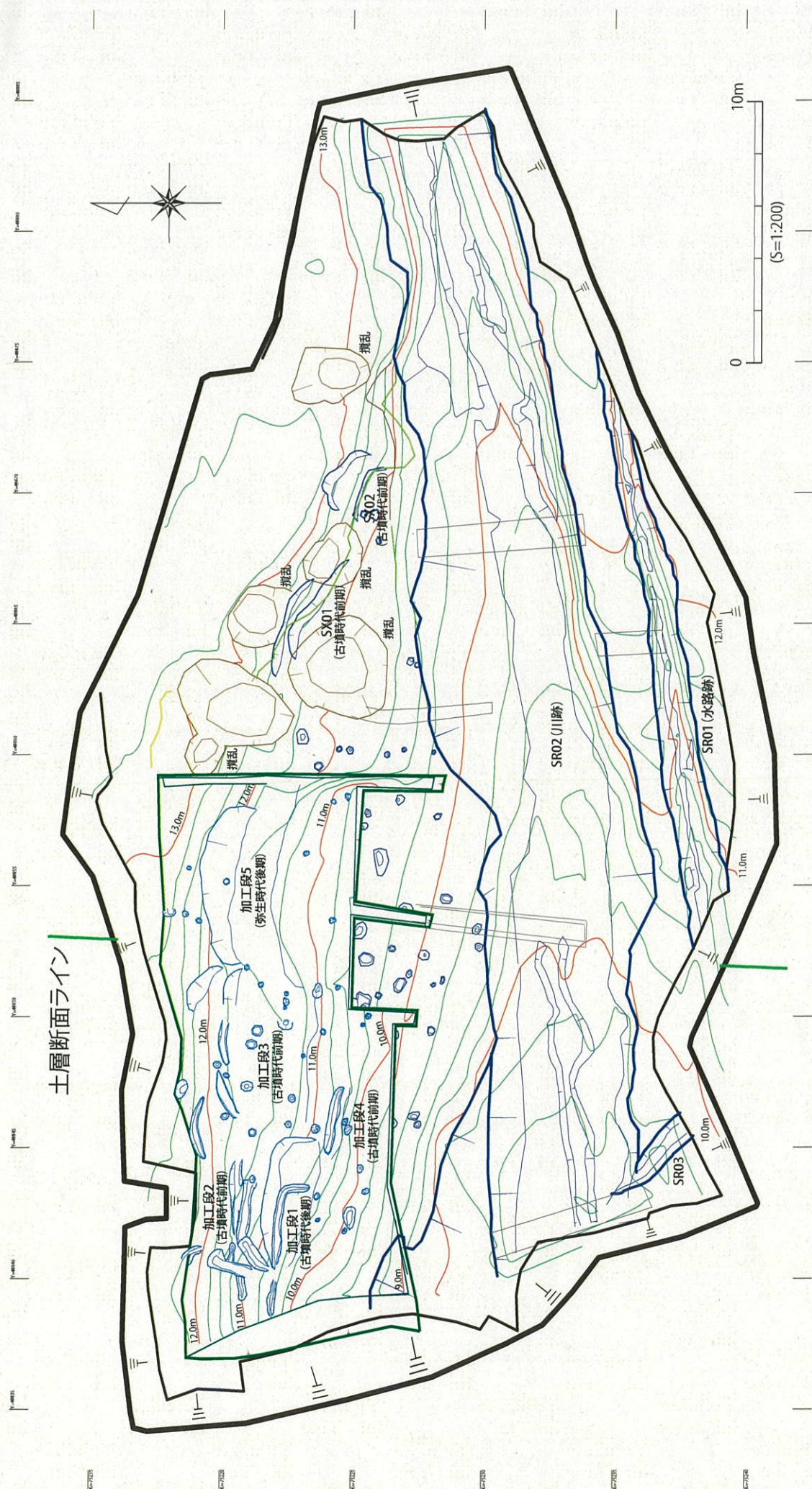
以上のように、この谷間では弥生時代後期以降に本格的な活動が始まった様子が見え、出雲平野南西部の九景川下流域における当該期の集落の実態を知る上で貴重な調査例となりました。また、中世期の造成跡とみられる盛土層は、遺跡の西方に立地する神西城跡との関連が注目され、築城時期など未だ不明な点の多い神西城跡の実態を検討する上で重要な成果といえます。



中上Ⅱ遺跡 調査地位置図



中上II遺跡1区 上層遺構平面図



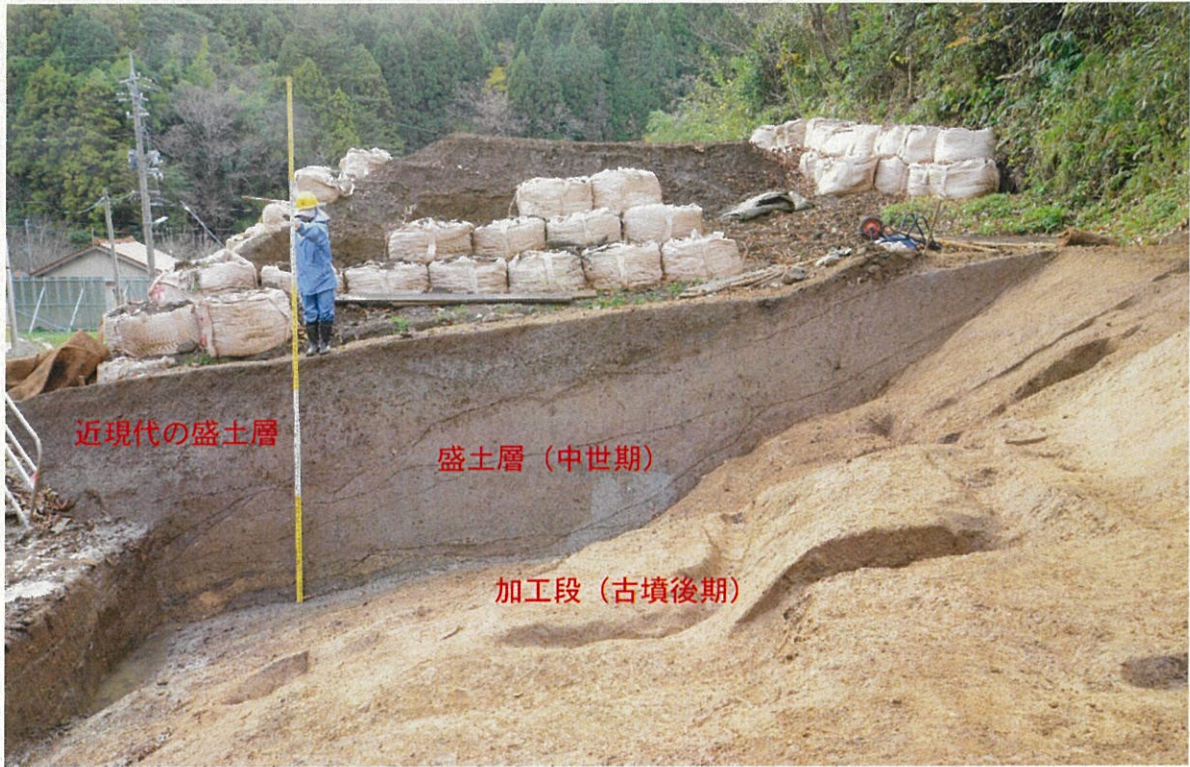
中上II遺跡1区 下層遺構平面図



中上Ⅱ遺跡空撮（南から）



1区谷部 加工段群調査状況（谷奥から）



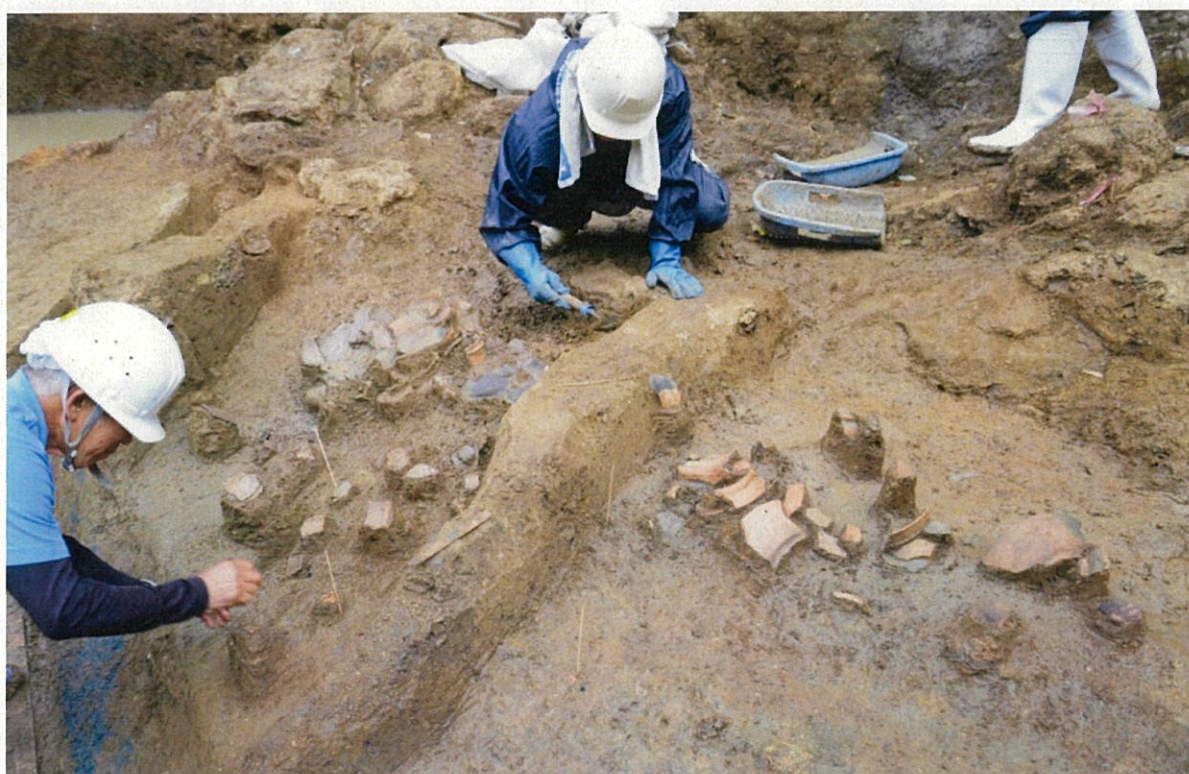
川跡北側斜面で検出した盛土層 (中世期)



加工段群の完掘状況 (西から)



加工段1（古墳時代後期）の遺物出土状況



S X 0 1（古墳時代前期）の遺物出土状況